

令和7年度

地域の大企業等がローカルゼブラ企業を中心とした
コミュニティ型産業集積を育てる実証と本活動自走化にむけた
共創ガイドライン作成事業

報告書

令和8年2月

経済産業省 近畿経済産業局

(委託事業者：株式会社ダン計画研究所)

目次

1. はじめに.....	1
(1) 背景・目的.....	1
(2) 事業内容及び実施方法.....	1
2. 事業内容.....	2
(1) 実証の場の設定.....	2
(2) 振り返りの会（ワークショップ）の運営.....	5
(3) 検証会議の実施.....	8
(4) フォーラムの実施.....	9
(5) 自律的取り組みに向けた登壇候補コミュニティ型産業集積の可視化.....	10
(6) 報告書の作成.....	10
3. 本事業の取りまとめと今後の展開.....	11
(1) 実証調査から得られたそれぞれの立場における参加意義.....	11
(2) 継続を促すための「STATEMENT」.....	12
(3) 今後の展開について.....	14
別添資料.....	24

1. はじめに

(1) 背景・目的

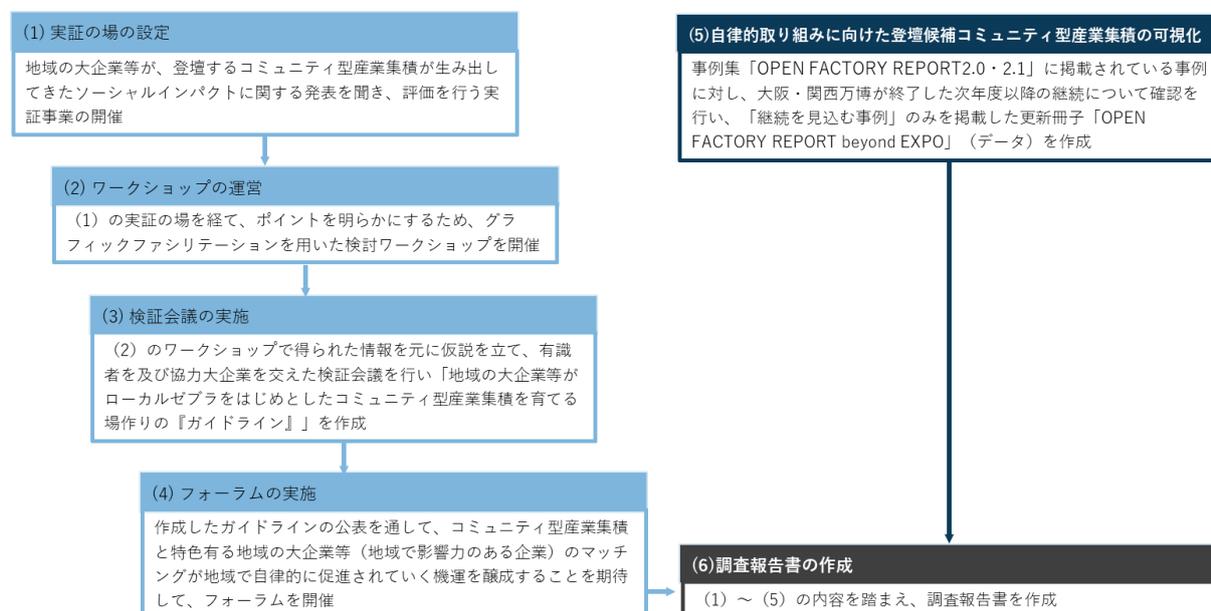
地方創生 2.0 の基本構想においては、各地方における「自主的・主体的」な地方創生が求められていることから、近年各地で増加する地域一体型オープンファクトリーをはじめとした「社会課題解決と共に成長するコミュニティ型産業集積（※）」への支援手法について、行政支援以外の在り方（地域の大企業等が地域のコミュニティ型産業集積を支援する仕組み）を見だし、「地域の大企業等がコミュニティ型産業集積をはじめとした地域の企業を育てる場作りの『ガイドライン』」を作成する。

また、将来的には本事業で作成した「ガイドライン」を活用いただき、コミュニティ型産業集積と特色有る地域の大企業等（地域で影響力のある企業）のマッチングの場が民間運営で回ることも期待。取り組みに共感する地域の大企業等の共創ネットワークが形成されることで、世界に伍する関西の新たなイノベーションプラットフォームに資することも期待する。

（※）コミュニティ型産業集積：従来の商習慣や業種の枠に囚われず、「同じ理念（コア・バリュー）」を持った多様な仲間が集まっており、理念の根幹に「地域の未来（ソーシャル・グッド※）」を持ち、自分たちの力で実現を目指し、継続的な取り組みを行っているコミュニティ。

(2) 事業内容及び実施方法

事業の背景・目的に記載した「ガイドライン」の作成に向けて、実証・検証作業を行う。事業内容・実施方法含むフローは以下のとおり。



○開催結果

当日は以下、9つのコミュニティ、14の企業に参加いただいた。

【登壇いただいたコミュニティ】

コミュニティ名	コミュニティ所在地
ごみの学校	京都府
JAPAN CRAFT EXPO 日本工芸産地博覧会	奈良県
瀬戸内ファクトリービュー	広島県
燕三条こうばの窓口	新潟県
ひつじサミット尾州	愛知県、岐阜県
FactorISM	大阪府
宮崎大学/日本 GX グループ	宮崎県
吉野と暮らす会	奈良県
RENEW	福井県

【参加企業】 ※企業名は広報用フライヤーに掲載のもの

株式会社アーバンリサーチ
株式会社オカムラ
株式会社カプコン
一般社団法人関西イノベーションセンター
QUINTBRIDGE (NTT 西日本)
JR 西日本 SC 開発株式会社
株式会社 JTB
大日本印刷株式会社
一般社団法人ナレッジキャピタル
フクシマガリレイ株式会社
POTLUCK YAESU
株式会社みずほ銀行
HOOPSLINK KANSAI (株式会社三井住友銀行)
りそなグループ

当日、企業が授与したコミュニティは下表のとおり。

株式会社アーバンリサーチ	ごみの学校、瀬戸内ファクトリービュー、 燕三条こうばの窓口
株式会社オカムラ	宮崎大学/日本 GX グループ、RENEW、 燕三条こうばの窓口、吉野と暮らす会
株式会社カプコン	FactorISM、JAPAN CRAFT EXPO 日本工芸 産地博覧会、RENEW、燕三条こうばの窓口
一般社団法人関西イノベーションセンター	ひつじサミット尾州
QUINTBRIDGE (NTT 西日本)	ごみの学校、FactorISM
JR 西日本 SC 開発株式会社	JAPAN CRAFT EXPO 日本工芸産地博覧会、 RENEW
株式会社 JTB	ごみの学校、FactorISM
大日本印刷株式会社	瀬戸内ファクトリービュー
一般社団法人ナレッジキャピタル	FactorISM
フクシマガリレイ株式会社	ごみの学校、FactorISM
POTLUCK YAESU	宮崎大学/日本 GX グループ、 ひつじサミット尾州、RENEW、FactorISM
株式会社みずほ銀行	宮崎大学/日本 GX グループ
HOOSLINK KANSAI (株式会社三井住友銀行)	FactorISM
りそなグループ	FactorISM、吉野と暮らす会



(2) 振り返りの会（ワークショップ）の運営

LOCAL X STAGE 参加企業から 10 名と有識者の京都橘大学 経営学部 丸山教授を交え、「Local X Stage 振り返りワークショップ」を開催。当日はグラフィックレコーディングという手法を用いて、議論を可視化しながら進化した。

前半は 2 グループに分かれ、参加のきっかけや入賞コミュニティを選んだ理由、期待について振り返りを行った。参加企業からは、ネットにない情報やキーパーソンとの繋がりを得られる点がメリットとして語られた。また地域連携において重要な点として、上下関係の支援ではなく「一緒に創る」姿勢や、社会課題を中心としたフラットな関係構築、熱量のある人材の想いに触れながらスモールスタートで取り組むことの重要性が挙げられた。

後半のセッションでは全体での意見交換に移り、次回以降の LOCAL X STAGE を持続可能なものにするためのヒントが話し合われた。参加によって生まれた新たな期待や可能性、参加しやすいイベントの形などがテーマとなり、大企業の課題感から連携のメリット、必要なサポートや今後の展開の可能性に至るまで、多角的な視点で議論が展開された。

有識者としてご参加いただいた京都橘大学の丸山教授からは、登壇するコミュニティの定義を改めて明確にする必要がある旨のご示唆をいただいた。検討の上、本事業の当初に定義していた「コミュニティ型産業集積」を「地域産業コミュニティ (LIC)」と表現を改め、以下のように定義する。

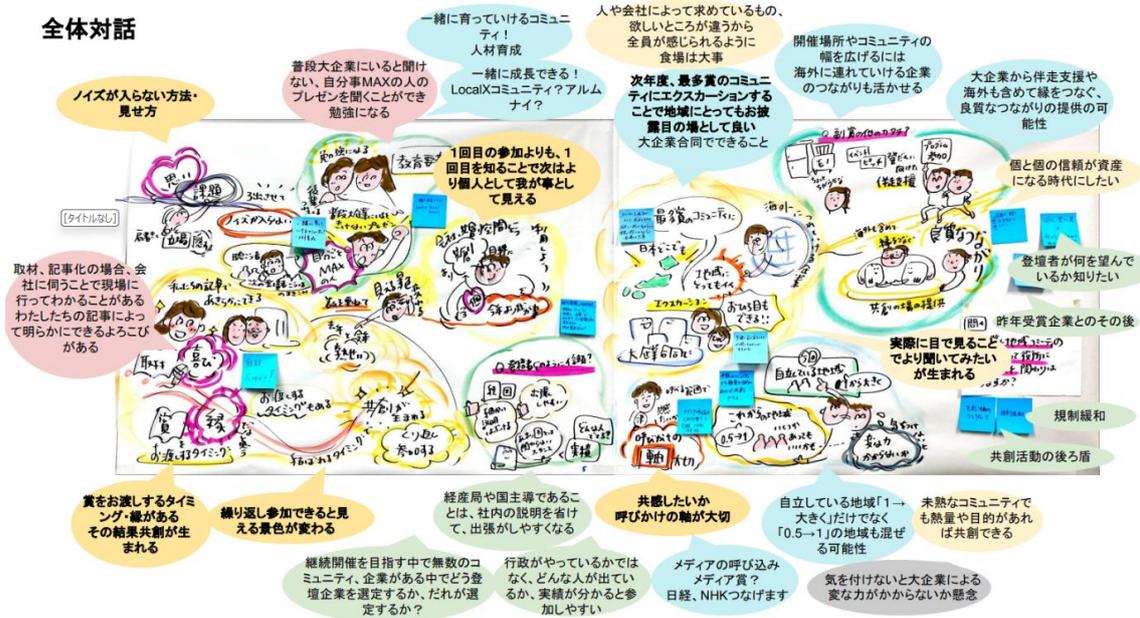
地域産業コミュニティ (LIC) (※) …特定地域に根ざした文脈 (歴史・文化・産業) を背景に、異業種の企業、教育機関、行政などが、組織・分野・立場の境界を越境し、地域固有の課題や価値創出に取り組む、自律的かつ継続的な共創型コミュニティ

(※) 「地域産業コミュニティ」の定義は、「産業コミュニティとオープンファクトリーの共進化—全国の事例から— (京都橘大学 経営学部 教授 丸山一芳氏)」より引用

○開催概要

イベント名	LOCAL X STAGE2025 振り返りワークショップ
開催日時	2025 年 10 月 28 日(火) 13:30~17:00
開催場所	近畿経済産業局内 第 2 別館 B 会議室
プログラム	オリエンテーション ワークショップ ●セッション 1 : Local X STAGE 2025 の振り返り (2 グループに分かれて意見交換) ・ Local X STAGE 2025 参加時の期待、きっかけ ・ 入賞者を選んだ理由とコミュニティへの期待 他 ●セッション 2 : Local X STAGE が次回以降持続的であるためのヒント (全体で意見交換) ・ Local X STAGE への期待 ・ 大企業側の理念/心持ち (継続していくためには何が必要なのか) 他

全体対話



※上記グラフィックファシリテーションは「株式会社たがやす」による。

(3) 検証会議の実施

(2) のワークショップで得られた情報を元に仮説を立て、有識者及び協力いただいた大企業を交えた検証会議を開催した。ここではコミュニティと大企業等の共創に向けたガイドライン素案の内容、今後どのようにして LOCAL X STAGE を継続していくかについても意見交換が行われた。

LOCAL X STAGE においては、熱量ある人材の出会いが新しいイノベーションや「うねり」を生み出す点が高く評価された。一方で、今後の LOCAL X STAGE の継続と拡大に向けては、行政主導から脱却し、参加企業や団体が持ち回りで運営する輪番制（協議会形式）や、信頼できる既存メンバーからの推薦・紹介制を導入した自律的な「ギルド」形式へと移行すべきとの意見もあった。さらに、質の高いコミュニティと企業を繋ぐ「目利き」機能をいかに仕組み化するかが課題としても挙げられた。

○開催概要

イベント名	LOCAL X STAGE 検証会議
開催日時	2025年12月19日(金) 15:00~17:30
開催場所	近畿経済産業局 本館 2F 第一会議室
プログラム	<ul style="list-style-type: none">・ 開会挨拶・本検証会議の趣旨説明・ 参加者紹介・ これまでの取組の振り返り（Local X STAGE、振り返りワークショップ）・ ガイドライン素案の紹介・意見交換 （進行：京都橘大学 経営学部 教授 丸山氏）・ 成果を最大化するとともに、継続的なステージを作るために必要なポイント・ 登壇するコミュニティに求められるポイント・ 地域の大企業等に求められるポイント・ Local X Stage 開催の意義
検証会議にご参加いただいた方々	<ul style="list-style-type: none">・ （座長）京都橘大学 経営学部 教授 丸山一芳氏・ 株式会社アーバンリサーチ・ NTT 西日本株式会社・ 株式会社カプコン・ 一般社団法人関西イノベーションセンター・ フクシマガリレイ株式会社・ FactorISM



(4) フォーラムの実施

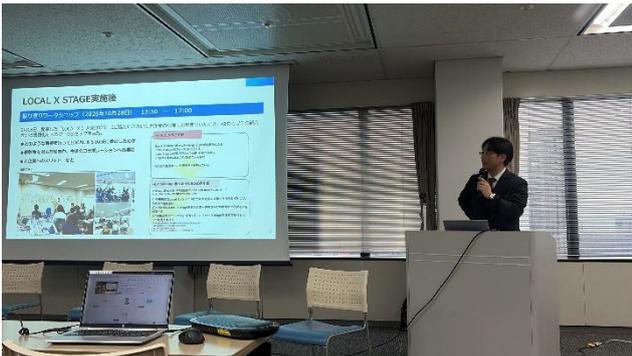
LOCAL X STAGE をきっかけに、実際に共創に繋がった事例のご紹介と共に、取組の継続を目指したガイドラインを公表し、関西を舞台とした「これからの地域共創の在り方」を示唆するイベントとして開催。

実際に共創に繋がった事例としては、福井県のコミュニティ「RENEW」と一般社団法人関西イノベーションセンター（以後 MUIC Kansai）による全国の産地間の連携を促す「Kogei Commons」の取組、大阪府を中心とするコミュニティ「FactorISM」と株式会社カプコンによる知財（IP）を活用した新たな価値創造への挑戦に向けた取組についてご紹介いただいた。続いて、中小企業庁より地域課題解決と経済成長を両立する「ローカルゼブラ企業」を育成する国の政策の紹介、LOCAL X STAGE、振り返りワークショップ、検証会議を経てとりまとめた、大切にしたい考え方、共通認識となる考え方を「LOCAL X STATEMENT」を公表した。トークセッションでは、共創には目的ありきではなく「共感」や「ワクワク」から始めるプロセスが不可欠であり、今後は LOCAL X STAGE というイベントの枠を越えて、多種多様な主体の手により自律的なネットワークへと発展していくことへの期待が語られた。

○開催概要

イベント名	LOCAL X STAGE EXTRA ~これからの地域共創~
開催日時	2026年2月16日(月) 15:30~17:30
開催場所	梅田センタービル E会議室
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> 主催者挨拶 LOCAL X STAGE の振り返り LOCAL X STAGE をきっかけに生まれた共創事例紹介 【2024年 Local X STAGE を起点に】RENEW × MUIC Kansai 【2025年 Local X STAGE を起点に】FactorISM × CAPCOM ローカル・ゼブラ政策について LOCAL X STATEMENT とガイドライン トークセッション クロージング・名刺交換会
参加者数	53名（登壇者・関係者含む）





(5) 自律的取り組みに向けた登壇候補コミュニティ型産業集積の可視化

事例集「OPEN FACTORY REPORT2.0・2.1」に掲載されている事例に対し、大阪・関西万博が終了した次年度以降の継続について確認を行い、「継続を見込む事例」のみを掲載した更新冊子「OPEN FACTORY REPORT beyond EXPO」(データ)を作成した。

本冊子では、全国の取組の事例として計 60 事例を紹介している。各ページでは、イベントデータその他、CORE VALUE、FEATURES(特徴)、FUTURE(将来の展望)、INNOVATION(開催を通して起きているイノベーション)、誕生秘話、TOPICS の他、取り組みに関わるメンバーを ONE TEAM として紹介している。

(6) 報告書の作成

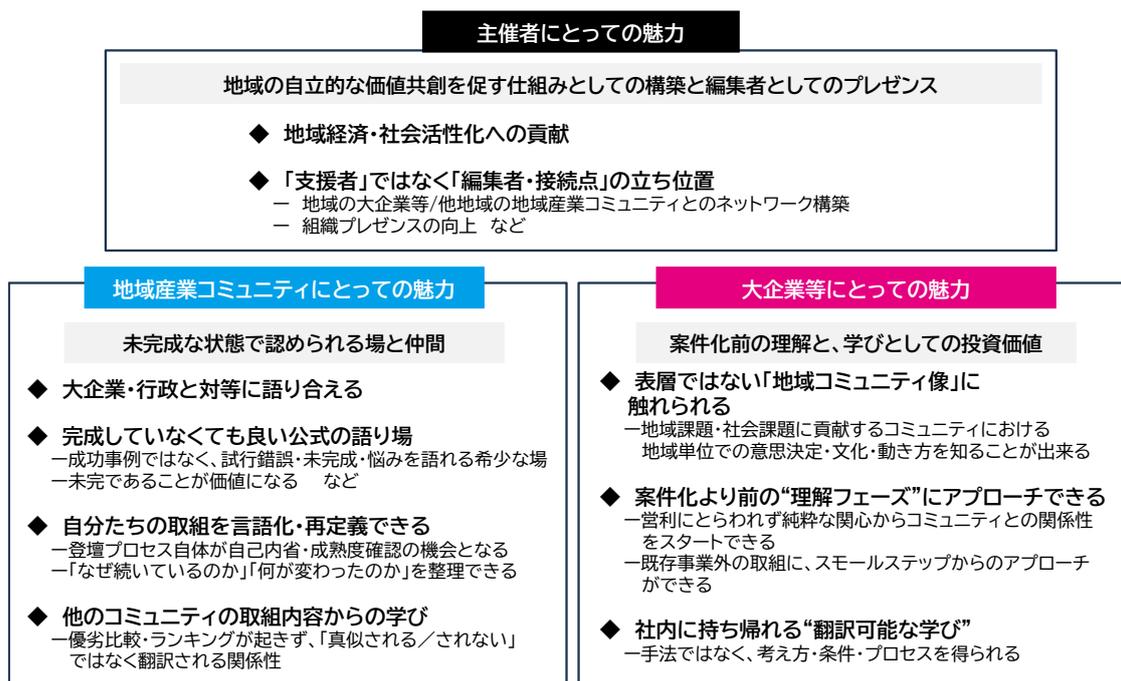
(1) ~ (5) の内容を踏まえ、調査報告書を作成した。

3. 本事業の取りまとめと今後の展開

(1) 実証調査から得られたそれぞれの立場における参加意義

本事業では、LOCAL X STAGE という実証の場を設け、実証の場の振り返りの場となるワークショップの開催、LOCAL X STAGE 検証会議を経て、地域の大企業等と地域産業コミュニティによる共創を生み出す場づくりについて、検討を重ねてきた。

LOCAL X STAGE は、「地域・社会課題解決」と「経済の活性化」の両立に向けた仕掛けの場として実験的に開催された。結果、様々な大企業と地域産業コミュニティとの間に新たなつながりが生まれ、新しい形での地域・社会課題への貢献へと発展しており、「地域産業コミュニティ」、「大企業等」、「主催者」それぞれにとっても、非常に意義のある取り組みとなっていることが明らかとなった。



また、中小企業庁が 2024 年 3 月に策定した「地域課題解決事業推進に向けた基本指針」では、ビジネスの手法を通じて地域課題の解決に積極的に取り組むローカル・ゼブラ企業や地域課題解決事業の意義を整理するとともに、多様な関係者との協業を実現し、必要な資金・人材を確保するための考え方や、社会的インパクトを可視化することの重要性を示している。

今回「LOCAL X STAGE」に登壇した各地の「地域産業コミュニティ」は、地域課題の解決を目指す「ローカル・ゼブラ企業」と近い取り組みを行っている。LOCAL X STAGE のような場を通じて地域課題解決や協業の重要性が広く社会に理解されると、事業推進の機運が高まるとともに、活動への共感が広がり、新たな資金や人材の流れが生まれる。そして、伴走支援者の協力を得ながら、地域の包括的な成長を目指すエコシステムが各地で構築されていくことが期待されている。「LOCAL X STAGE」のような仕組みを継続することは、地域の大企業等が伴走支援者として関わるきっかけを生み出し、このエコシステムを実際に機能させるために重要だと考える。

(※1) 地域課題解決事業推進に向けた基本指針

https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/chiiki_kigyuu_kyousei/2024/20240301_01.pdf

(※2) ローカル・ゼブラ企業…事業を通じて地域課題解決を図り、域内企業等と協業しながら、新たな価値創造や技術の活用等により社会にインパクトを生み出しながら、収益を確保する企業を指す。(地域課題解決事業推進に向けた基本指針(補足)より(2024年3月 中小企業庁 創業・新事業促進課))

https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/chiiki_kigyou_kyousei/2024/20240301_02.pdf

(2) 継続を促すための「STATEMENT」

本事業で開催してきたワークショップや検証会議等で議論を重ねる中で、「単に活動を継続させるための仕組み」を考える以上に、「意義ある取り組みにするための重要なポイント」を、「約束事」として広く共有すべきだという意見が多く挙がった。今後さまざまな主体がこの約束事を参考にし、新たな取り組みを自発的に進めていくような「潮流(ムーブメント)」を生み出すことが重要であるという観点のもと、運営事務局や協力企業、関係者の意見を集約して作成されたのが、以下の「STATEMENT」である。

LOCAL X STATEMENT

あるべき姿(Being)

地域に根ざした挑戦をきっかけに、共創し、学び合う、おもしろがる。
そして、そのプロセスが中長期的な”パートナーシップの土壌”となる

(Behavior)

- **視点(時間軸):**関係づくりから中長期的な相互成長を大切にすること
短期的な成果を急ぐのではなく、まずは「対話」を通じて信頼関係(関係性)を深め、そのプロセスを楽しみながら、中長期的な相互成長を目指す考え方を大切にします。
- **アプローチ:**まずは小さくても「始める」こと
個人の「やりたい」、「できる」等思いや動機から始める「スモールスタート」の考え方を大事にします。
- **スタンス:**対等なパートナー(イコール・パートナー)の姿勢をとること
支援する/されるの関係性ではなく、イコール・パートナーとしての関係で取り組みます

まず、目指す「あるべき姿(Being)」を「地域に根ざした挑戦をきっかけに、共創し、学び合い、おもしろがる。そして、そのプロセスが中長期的な”パートナーシップ”の土壌となる」という姿で示している。その上で、この姿を体現するために必要な行動や姿勢を「心・技・体」になぞらえ、【時間軸を持つ視点】、【アプローチの仕方】、【臨むスタンス】の3つに整理した。これらを、大企業、地域産業コミュニティ、そして主催者の三者が共に意識すべきポイントとして可視化したものが、(Behavior)である。

○視点（時間軸）：関係づくりから中長期的な相互成長を大切にすること
短期的な成果を急ぐのではなく、まずは「対話」を通じて信頼関係（関係性）を深め、そのプロセスを楽しみながら、中長期的な相互成長を目指す考え方を大切にします。

目先の結果を追い求めるのではなく、「対話」をスタートに互いの関係性を構築し、そのプロセスを楽しみながら、どちらかだけが得をするのではなく、互いに成長し合える関係性を目指すことを意図する「視点」のポイントを示すもの。

○アプローチ：まずは小さくても「始める」こと
個人の「やりたい」、「できる」等想いや動機から始める「スモールスタート」の考え方を大事にします。

企業規模が大きいほど、またコミュニティ規模が大きいほど、意思決定や行動にスピード感を持たせることが難しくなる。しかし、この「共創」という機会においては、従来の組織論にとらわれず、「とりあえずやってみる」を大切にすることが重要であることを意図する「行動」のポイントを示すもの。

○スタンス：対等なパートナー（イコール・パートナー）の姿勢をとること
支援する/されるの関係性ではなく、イコール・パートナーとしての関係で取り組みます。

企業規模の違いで「支援」する・されるの立ち位置に陥りがちであるが、「企業群となったコミュニティ」は各社の数字を合算すれば売上も社員数も規模が大きくなり、大企業と遜色なく対等な経済規模を持つものと考え、互いに活かしあうようなイコール・パートナーとして接することが重要であることを意図する「姿勢」のポイントを示すもの。

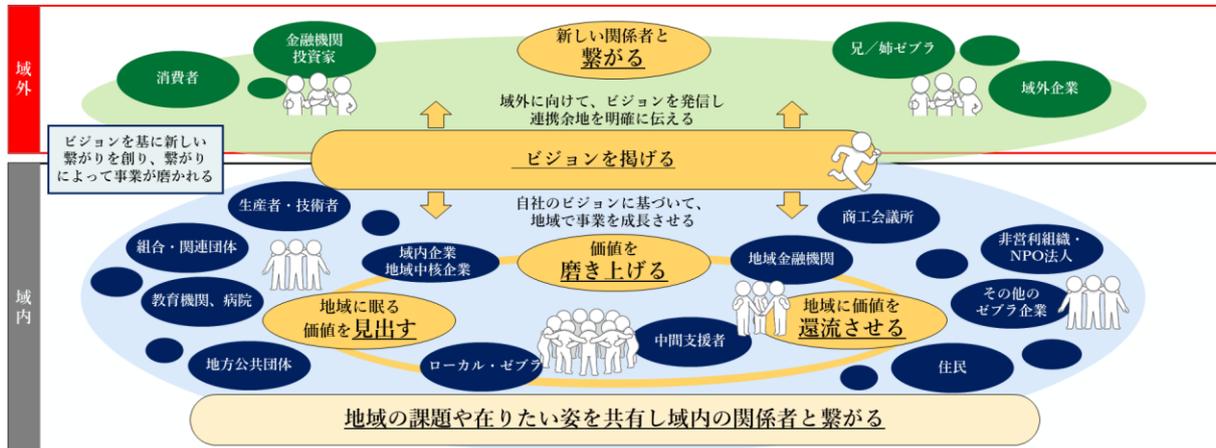
そして、この3つの Behavior を通して目指すあるべき姿が、

地域に根ざした挑戦をきっかけに、共創し、学び合い、おもしろがる。
そして、そのプロセスが中長期的な”パートナーシップ”の土壌となる

「STATEMENT」を作成するにあたり、関係者から意見を取りまとめる中で最も重要なポイントとなった点が「おもしろがる」ことである。いくら共創や学び合いを目指す関係であっても、互いに「おもしろい」と感じられなければ、取り組みは「始まらない」し「継続しない」。この「おもしろがる」という感情があってこそ、中長期的な関係性が続き、強固なパートナーシップの土壌が育まれる。上述の STATEMENT は、こうした関係者たちの実体験に基づき、それぞれの取り組みが意義あるものとして継続していくことを願いながら紡ぎ出された言葉である。

(3) 今後の展開について

中小企業庁のローカル・ゼブラ事業においても、「今後、地域のエコシステムを強化するためには、地域に経営資源を呼び込み、ローカル・ゼブラ企業と地域内外の経営資源の提供者となり得る域内外のステークホルダー（地域の老舗・中核企業や金融機関、社会的インパクトに共感する大企業等）との中間支援機能を持った地域事業づくり会社が重要であること」が提示されている。



出所：令和7年度「ゼブラ企業創出・育成のためのエコシステム定着に向けた支援・分析事業（地域実証事業）」説明資料（中小企業庁）P10より引用

https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/chiiki_kigyuu_kyousei/2025/20250724_05.pdf

そこで、このような政策の方向性と協調しながら、今回取りまとめた「LOCAL X STATEMENT」を活かし、企業、地域産業コミュニティ、公的機関、またはそれに準ずる組織などが連携して地域の価値共創を推進することを目指し、「LOCAL X STAGE ガイドライン」を作成した。これは、これまで実証してきた LOCAL X STAGE の作り方を「企画・準備・開催・開催後」の流れに沿って紹介するものである。もちろん、「LOCAL X STAGE」という形式は、地域産業コミュニティと大企業等が出会うための一つ的手段にすぎず、必ずしも同じ方法で開催する必要はない。開催される地域や関わるステークホルダーによって、最適な交流の形は異なるものと考えられる。

従い、交流の形が変わったとしても、今回作成した STATEMENT が多様な主体にとっての「共通言語」や「約束事」として広く参考にされ、様々な地域で新たな共創の取り組みが進んでいくような潮流（ムーブメント）を作り出すことを期待したい。



LOCAL X STAGE ガイドライン
Guideline for creating “LOCAL X STAGE”

令和8年2月
近畿経済産業局

LOCAL X STAGE とは

「LOCAL X STAGE」は、地域産業コミュニティ(※)、大企業等、主催者が連携して、地域社会の課題への貢献、より良い地域社会の未来を目指すための実験的な場として開催してきました。2024年度は、イノベーション・ストリームKANSAI8.0の一部として、2025年度は、EXPO ThemeWeeks CONNECTの一部として開催しました。

「LOCAL X STAGE」では、それぞれの地域産業コミュニティが生み出したイノベーション(ソーシャルインパクト)についてプレゼンテーションを行い、地域の大企業等が「内容に共感した」、「発展可能性に期待する」等の視点から考察。考察後は、大企業等から自社の成長とベクトルが合う地域産業コミュニティに対して「企業賞」を授与するとともに、今後のコミュニケーション機会を約束してきました。

これまで開催された2回のLOCAL X STAGEでは、様々な大企業等と地域産業コミュニティとの間に、単なるマッチングを超えた「熱量」ある新たな繋がりが生まれています。この新たな繋がりにから、従来とは異なる新しい形での、地域社会の課題への貢献が少しずつ生まれつつあります。

地域・社会課題解決と経済活性化の両立
に向けた仕掛けとして



「LOCAL X STAGE」の開催

地域産業コミュニティ(※)

特定地域に根ざした文脈(歴史・文化・産業)を背景に、異業種の企業、教育機関、行政などが、組織・分野・立場の境界を越境し、地域固有の課題や価値創出に取り組む、自律的かつ継続的な共創型コミュニティ。

【提供できるリソース(例)】地域に根差した取組、地域のネットワーク、社会課題解決に向けた熱意・パッション

(※)「地域産業コミュニティ」の定義は、「産業コミュニティとオープンファクトリーの共進化ー全国の事例からー(京都橋大学 経営学部 教授 丸山一芳氏)」より引用

大企業等

地域産業コミュニティとの協業・共創に関心があり、以下を例とするリソースを提供できる大企業、一般社団法人等。

【提供できるリソース(例)】自社の所有する共創スペース、人材、広報ツール等、社会課題解決に向けた熱意・パッション等

主催者

大企業等、地域産業コミュニティいずれにもネットワークがあり、以下を例とするリソースを提供できる主体。

【提供できるリソース(例)】会場、企画提案、人的ネットワーク

様々な大企業と地域産業コミュニティの新たな繋がりを創出。
新たな繋がりにから、新しい形での、地域社会課題への貢献へ

継続することで

様々な形から地域社会の課題へ貢献、そして、より良い地域社会の未来の実現へ
(social good)

LOCAL X STATEMENT

これまで開催された2回のLOCAL X STAGE参加企業との意見交換を経て、大切にしたい考え方、共通認識となる考え方を「LOCAL X STATEMENT」としてまとめました。今後、以下のSTATEMENTに賛同する、企業、地域産業コミュニティ、公的機関、またはそれに準ずる組織が連携し、共に地域の価値共創が推進を目指して、活動が続くことを期待します。

LOCAL X STATEMENT

あるべき姿(Being)

地域に根ざした挑戦をきっかけに、共創し、学び合う、おもしろがる。
そして、そのプロセスが中長期的な”パートナーシップの土壌”となる

(Behavior)

- **視点(時間軸):関係づくりから中長期的な相互成長を大切にすること**
短期的な成果を急ぐのではなく、まずは「対話」を通じて信頼関係(関係性)を深め、そのプロセスを楽しみながら、中長期的な相互成長を目指す考え方を大切にします。
- **アプローチ:まずは小さくても「始める」こと**
個人の「やりたい」、「できる」等想いや動機から始める「スモールスタート」の考え方を大事にします。
- **スタンス:対等なパートナー(イコール・パートナー)の姿勢をとること**
支援する/されるの関係性ではなく、イコール・パートナーとしての関係で取り組みます

参考資料として、これまでのLOCAL X STAGEの開催経験から、「LOCAL X STAGEの創り方」を次ページにご紹介します。

(参考)LOCAL X STAGE の創り方

LOCAL X STAGEでは、「企画」、「準備」、「開催」、「開催後」という流れに沿ってSTEPが進行します。それぞれのSTEPでの運営のポイントを次のページからご紹介します。



それぞれのSTEPでの、運営のポイントは次のページからご紹介します。

～それぞれの立場からみたLOCAL X STAGEの魅力～

「LOCAL X STAGE」開催またはプレイヤーとして参加することは、それぞれのプレイヤーにとって、次のような魅力があります。

主催者にとっての魅力

地域の自立的な価値共創を促す仕組みとしての構築と編集者としてのプレゼンス

- ◆ 地域経済・社会活性化への貢献
- ◆ 「支援者」ではなく「編集者・接続点」の立ち位置
 - ー 地域の大企業等/他地域の地域産業コミュニティとのネットワーク構築
 - ー 組織プレゼンスの向上 など

地域産業コミュニティにとっての魅力

未完成な状態で認められる場と仲間

- ◆ 大企業・行政と対等に語り合える
- ◆ 完成していなくても良い公式の語り場
 - ー 成功事例ではなく、試行錯誤・未完成・悩みを語る希少な場
 - ー 未完であることが価値になる など
- ◆ 自分たちの取組を言語化・再定義できる
 - ー 登壇プロセス自体が自己内省・成熟度確認の機会となる
 - ー 「なぜ続いているのか」「何が変わったのか」を整理できる
- ◆ 他のコミュニティの取組内容からの学び
 - ー 優劣比較・ランキングが起きず、「真似される／されない」ではなく翻訳される関係性

大企業等にとっての魅力

案件化前の理解と、学びとしての投資価値

- ◆ 表層ではない「地域コミュニティ像」に触れられる
 - ー 地域課題・社会課題に貢献するコミュニティにおける地域単位での意思決定・文化・動き方を知ることが出来る
- ◆ 案件化より前の“理解フェーズ”にアプローチできる
 - ー 営利にとらわれず純粋な関心からコミュニティとの関係性をスタートできる
 - ー 既存事業外の取組に、スモールステップからのアプローチができる
- ◆ 社内に持ち帰れる“翻訳可能な学び”
 - ー 手法ではなく、考え方・条件・プロセスを得られる

①プログラムの企画・検討

「LOCAL X STAGE」では、それぞれの地域産業コミュニティ(以下「コミュニティ」と記載)が生み出したイノベーション(ソーシャルインパクト)についてプレゼンテーションを行い、それをもとに、地域の大企業等が「内容に共感した」、「発展可能性に期待する」等の視点から考察・評価します。そして、大企業等から自社の成長とベクトルが合うコミュニティに対して「企業賞」を授与する流れとなります。



コミュニティによる
プレゼンテーション



企業による考察・評価



企業賞の授与式

②協力いただく大企業等との調整・募集

協力いただく大企業等はLOCAL X STATEMENTの考え方について理解、共感する企業等であることが前提となります。加えて、満たすことが望ましいポイントには以下が挙げられます。

【望ましいポイント】

◆対話から関係を築き、実行へと導く「コミュニケーター」の存在

「対話」から始める関係性からの発展は、「大企業ならではの目線を持ちつつ、地域と共創するために必要なステップなどを理解し、実行に移せるようなコミュニケーターがいることが、共創実行における加速度を高める重要なポイントとなります。

◆連携手段の可視化

企業と地域が連携する際、(比較的实现が容易なものなど)連携手段をあらかじめ目に見える形で示しておく、コミュニティ側から企業に対して連携の相談をする際にわかりやすく、「お互いに出ること」から小さく連携を始めるスモール・スタートを促進することができます。

◆これまでの地域や社会との共創活動を自ら発信・可視化していること。

社会的責任(CSR)への取り組み内容や成果を、外部に積極的に開示していること。そのことが、企業にとって『次の一歩』となる新たな取り組みを組織として求める背景にもなっているため、共創をスピーディーに進めやすい状況が期待されます。

③実施体制の検討

実施体制の検討に際してのポイントは以下が挙げられます。

◆運営体制チームの結成

運営体制が明確となることは、協力する大企業等や参加するコミュニティにとって、安心感につながるとともに社内手続き、関係者の合意を得る上で重要な視点になります。公共または公共に準ずる組織による主催、協力体制があれば、さらなる安心感に繋がります。

◆登壇するコミュニティ・協力企業双方に理解がある担当者の配置

コミュニティ(登壇者)・協力企業双方について理解している人が担当となり、企画に関わることで、より確度の高いマッチング・共創の場づくりにつながる、開催テーマ・コンセプト設定が可能となります。

◆自由度の高い参加形式

イベント参加においての「義務」をできるだけ排除し、「ゆるく・ふわっと関わる」ことを認める形式とすることで、「自分事」としての共創に繋がります。

④登壇するコミュニティの検討・依頼

「LOCAL X STAGE」にて登壇いただくコミュニティは、企業一社ではなく、企業群となって社会・地域課題解決と地域成長を実現する「地域産業コミュニティ」として参加いただきます。コミュニティにおいても、LOCAL X STATEMENTの考え方について理解、共感するコミュニティであることが、前提となります。加えて、過去2回の実施結果をもとに、その後の大企業等との共創にも繋がりがやすいコミュニティの特徴を以下の「望ましいポイント」として整理しました。

【望ましいポイント】

◆行動力と熱量のあるコミュニティ

行動力と熱意のあるコミュニティは、共創パートナーとなる企業等に対して、将来的に自社の本業や新規事業と結び付き、互いに学び合い高め合える関係になり得るのではないかと期待を抱かせます。さらに、コミュニティの持つ活気や熱量が社内にも波及していくことへの期待感にも繋がります。

◆地域に根差した企業が参画しているコミュニティ

地域に根差した企業が参画しているコミュニティは、行動の具現化が早く、共創の早期実現が期待されます。

◆「関わりしろのある面白さ」を醸すコミュニティ

企業と地域が共に元気になる取組を「循環」させている等、共感を起点に、「関わりしろのある面白さ」を醸すこと。目的・目標・次の行動を語るキーパーソンがコミュニティに存在することも「関わりしろのある面白さ」に繋がります。

【過去登壇したコミュニティ例】

●FactorISM

(2025年にて、最多数の賞を受賞)

ものづくりの現場を一般開放し、人々の生活を支え、世界を魅了するものづくりを体験、体感してもらうイベント「FactorISM」の開催等を通じて、地域競争から地域共創を目指す。



●フィッシャーマン・ジャパン

(2024年にて、最多数の賞を受賞)

水産業に革命を起こす若き漁師集団。水産業を「カッコよくて、稼げて、革新的な、新3K産業へ」とすることを旨とする。



⑤広報・集客

主催者、大企業等、コミュニティのネットワークを活用して、広報・集客を図ります。

【LOCAL X STAGE 広報用フライヤー】

企画

準備

開催

開催後

⑥プログラムの実施

ここでは、当日のタイムラインイメージと共に、効果のあった工夫点をいくつかご紹介します。

●当日のタイムラインイメージ

13:00	開場・受付開始
13:30	開会挨拶・趣旨説明・参加企業紹介
13:50	コミュニティによるプレゼンテーション1 (5コミュニティ)
15:10	休憩
15:30	コミュニティによるプレゼンテーション2 (4コミュニティ)
16:30	審査時間及び出展会場内ブース紹介/
16:50	企業賞発表・授与式
17:30	クロージング・交流会



効果のあった工夫点

- ◆「協力する大企業等が連携できること」のイメージを登壇するコミュニティに共有した上で、発表内容を考えていただく。
- ◆コミュニティの発表資料を、協力する大企業等に事前に共有
- ◆イベント後の交流時間を確保することで、聴講者も(次回の)参加者となる仕掛けにつなげる。

企画

準備

開催

開催後

⑦振り返りの会

「LOCAL X STAGE」実施後の振り返りの会は、協力する大企業等同士のネットワーキング機会になると共に、「次回はこうしたい」といった課題と次回への期待をアウトプットする有意義な機会となります。ここでは、振り返り会のモデルプログラムについて紹介します。

2025年度では、より活発な意見交換の場とするため、グラフィックを用いて意見を可視化しながら対話をするグラフィックレコーディングの手法を用いました。

●モデルプログラム

13:30	オリエンテーション
13:50	グループディスカッション ・参加したきっかけ ・授与の理由、コミュニティへの期待
15:00	休憩
15:10	全体ディスカッション ・LOCAL X STAGEへの期待・継続のために必要な取組等
16:30	ラップアップ・クロージング



グラフィックレコーディングによる
意見の可視化の様子

⑧イベント後のフォローアップ

「LOCAL X STAGE」開催後、コミュニティと大企業等とのコミュニケーションがどのように進んでいるのか、定期的にフォローアップすることが、次回開催に向けたヒント・関係づくりに繋がります。

LOCAL X STAGEをきっかけに生まれるイノベーション

LOCAL X STAGEでの出会いをきっかけに生まれている共創事例のうち、LOCAL X STAGE 2024をきっかけに共創の取組がスタートした「RENEW×一般社団法人関西イノベーションセンター(MUIC Kansai)」の事例をご紹介します。



RENEW × MUIC Kansai

KOGEI COMMONSは、オープンファクトリーイベント「RENEW」を運営する一般社団法人SOEと、株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ、一般社団法人関西イノベーションセンター(MUIC Kansai)の3社で発足した、日本のものづくり産地に新たな循環を生むプロジェクトです。

作り手・産地・地域外の方が垣根を越えて集い交流する「COMMONS＝共有地」をなすことを目指しています。最大の目的は、全国の伝統工芸や産業工芸の担い手が集い、知識や技術を交わらせる「学び合いの場」を築くことです。互いの課題や知見を交換し、得たノウハウをそれぞれの地域へ持ち帰ることで、産地の新たな展開を促します。



KOGEI COMMONSの取組として、2025年10月10日～12日に福井県鯖江市のうるしの里会館で開催され、「RENEW」と同時開催されました。会場では、全国のオープンファクトリー関係者や事業者が対話する「MEET」、多様な技術を体験できる「WORKSHOP」、ものづくりの背景を伝える「EXHIBITION」や買い物を楽しむ「MARKET」、実践者が語り合う「TALK EVENT」といった多彩なプログラムが開催されました。

今後は、産地間の交流促進・情報連携や特定産地に対する伴走支援、体系的なマニュアル整備等を予定しています。



写真出所: LOCAL X STAGE EXTRA登壇資料(RENEW×MUIC Kansai)

継続的に魅力あるステージを作る上でのヒント

LOCAL X STAGEは、コミュニティと地域の企業のより良いマッチングの場となるためのSTAGEが中心の企画ですが、目的によっていろいろな仕掛けを組み合わせることもできます。地域性を演出、集客を図る、来場者を楽しませる、新たな登壇者につなげるなど、目的に応じたイベントを組み合わせ実施することも可能です。

こうした工夫や仕掛けが、継続的に開催される魅力あるSTAGEづくりにも繋がります。

◇開催地や現場訪問の仕掛け

前回、最多数を受賞したコミュニティの拠点エリアを、次回の開催地とすることで、開催前後にコミュニティの現場訪問(Excursion)やコミュニティメンバーとの交流を取り入れることが可能となります。こうした仕掛けにより、さらなる共創を促す、または、まだ参画していない企業がLOCAL X STAGEへの参画を検討する入り口としても声かけができ、継続的な開催に繋がります。

◇次回以降の登壇候補のコミュニティ・協力企業発掘につながる仕掛け

イベント開催時には、登壇候補のコミュニティ、協力企業候補も参加者として参加いただける仕掛けを設けることで、継続的な開催に繋がります。

◇登壇したコミュニティや大企業等が繋がりが続けることの出来るアルムナイ的な仕掛け

一度出会って終わりではなく、コミュニティ同士や他の協力企業とも関わり、一緒に育っていけるアルムナイ的な仕掛け作りがイベントそのものの魅力創出に繋がります。

写真で振り返る LOCAL X STAGE 2024 / 2025



別添資料

* 「OPEN FACTORY REPORT beyond EXPO」

令和7年度

地域の大企業等がローカルゼブラ企業を中心としたコミュニティ型産業集積を育てる実証と本活動自走化にむけた共創
ガイドライン作成事業

報告書

令和8年2月

経済産業省 近畿経済産業局

(委託事業者：株式会社ダン計画研究所)

